

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 37 号

平成 17 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 新渡戸稲造「一日一言」より（4）

8 月 19 日

病気ほど高価なものはない。痛い目をして金出して、親戚朋友に心配かけて、これほど勘定の会わぬものはないとは、簿記の貸方のみ見て、借方を読まぬ計算。病には、高価を値するだけの実質あるに注意せば、必ず払うた金額以上の代物を得る。

いろかはる秋の菊をば一とせに再びにほふ花とこそ見れ

8 月 23 日

自分の力が人の役に立つと思う時は、人がでしゃばると笑うとも進んでやれ。自分の力を見せるためなら、人が勧めても退いてやるな。天の我に力をあたえたるは、人のために尽くさすためなり。力を善用すればするほど力に勢いがつく。用いざればますます減じ、悪用すれば全く枯る。

8月29日

一朝一夕に成るものは一朝一夕に敗る。立身も気長に根底堅きは永続す。長年月の間には自ら練習も積み、一時の失敗に落胆せず、一時の成功に誇らず、滔々（とうとう）として流るる大河のごとくなるべし。

流れては海となるべき谷川も

しばし木の葉の下くぐるなり

吉野川その水上を尋ねれば

むぐらの雫（しずく）萩の下のつゆ

注 むぐら（雑草）

8月30日

人は使われるに、ただ機械のように働くのみにてよしと思うものあり。人を使う者の中にも、ただ人を機械のように働かせてよく使いりと思うものがある。機械は壊れることあり。壊れる時には、使用せるものを傷つくる事しばしばあり。何事にも心と情とを加味すべし。

心せよ使ふも人の思ひ子ぞ

わが思ひ子に思ひくらべて

8月31日

暑いあついと幾度いっても涼しくはならぬ。夏の暑きは、冬の寒きとともに当然のこと。この順が転倒したらそれこそ大変。夏暑ければこそ稲が繁る、有りがたいと思うが至当である。さらに思え、この夏日にさえ、なお労作する人々の難儀を。

明治天皇御製

重荷引く車の音ぞきこえける

照る日の暑さ耐えがたき日に

9月1日

よかれあしかれ、人間としてこの世に生まれたことを思えば、造物主に感謝せずにはおられぬ。幼少の折父母の暖かき愛に育てられたことを思えば、親兄弟に感謝せずにはおられぬ。

今は学校に行きて学び、あるいは安んじて職を営むことを思えば、国と君とに感謝せずにはおられぬ。

思えば人生は有り難きもの。

たまたまに人と生れて時の間も

忘るまじきは四恩なりけり

9月4日

己のなした事業は偉く見ゆる。己の経たる艱難は大きく思われる。これは、他の事業や他の艱難を計り知らぬが故である。人の仕事を貶(けな)すものは、自ら仕事をせる経験なきものの癖(くせ)である。実際功を建てた人は自身の手柄をも語らず、人の苦心を讃す。

物事の目に立つことは悪しきぞや

上手といふは音も香もなし

m身が入ると稲はうつむく人は身が

重うなる程のし上がるなり

9月5日

上り下りはあらゆる運動の法則なれば、国に盛衰あり、社会に浮沈あり、個人に幸不幸がある。上りたりとて油断も安心もならず、下りたればとて落胆沮喪するにも及ばぬ。上下浮沈にかかわらず、心だけは平く滑らかに保つべし。

満つるより欠くる習ひぞ円(まど)かなる一夜の月の影にても知れ

月だにもなほつれなしや出でて入り満ちては欠けぬ哀れ世の中

世の中は満つればかくるかく月の十六夜(いざよい)の空は人の身の上

9月6日

罪はとかく他に転嫁したきもの。夫は妻に家の傾く罪を被（かぶ）せ、子は親に放蕩の罪をなすくり、雇人は主人に無能の罪を負わず世の中に、他の罪まで独りにて引き受けるは義侠。世人はもちろん、友人親族に疑われてもなお黙然として、世の憂きと人の恨みを一身に負うは神の業。

身に負えるへる科（とが）は思はで主と親をそしる人こそうたてかりけれ

9月7日

爵位が高いとか、家柄が好いとか、月給が上だとか、学問があるとか、普通世人が買いかぶりやすいものを所有するものは、自身でも自身が買いかぶりがちになるもの故、己より社会上の地位低きものには、特に丁寧にするが大切。人は無位無官、裸で生れ裸で死するを忘るべからず。

位なき身をば疎むな公卿高家（こうげ）四海兄弟同じたねはら  
誰も皆人は裸で貴かれそれが生れの儘（まま）のもと値ぞ

9月9日

夫婦、親子、兄弟の間にも、意見を異にすることあるはやむをえぬ。人各見る所有れば、説の異（ちが）うは顔の異なるうがごとし。互いに容れ合うべし。不和は避くべし、家庭の仲悪しきは個人の墮落、一家の傾き、一国の憂いともなるなり。

身代の太き柱も不和合の

あらし風には吹き倒すなり

## 9月14日

慶長5年(西暦1600年)の今日は、天下分け目の関が原の大合戦ありし日である。その後二百余年の泰平続けり。吾人の一生にも必ず命を賭(と)して戦うべき時は免れ難い。その日は今日か明日かと待たずとも、まさに眼前に迫り、時々刻々動員令が行われ、既に戦闘が開始せられているなり。

## 9月15日

好しと認めたものは、即座に実行に取りかかるがよし。躊躇(ちゅうちょ)する間に決心は薄らぐ、善事をなすに月日を選ぶ要はない。善行する日は吉日、吉日を待つ間に吉日は去り行きて凶日のみ残るなり。

明日よりはあだに月日を送らじと

思ひしかども今日も空しく

明日といふ心にもものさへられて

今日も空しく暮れ果てにけり

## 9月19日

情欲は生存の法則なれば、全くこれを無視するは不合理の要求である。故にこれを尊重するの道も設けてあるが、さてその道の広狭はともかく、世の道と認められたるものは、破れば必ず罰あるものと心得るべし。

修行者は男女のなかを遠ざけよ

火には剣もなまるものなり

いかばかり恋の山路のしげければ

入りと入りぬる道を忘るる

9月20日

権利も義務も道理(もっとも)であるが、いわば欲の学理に過ぎない。欲で繋がれる社会には道理至極の理論なれど、夫婦、親子、兄弟、朋友(ほうゆう)の間柄には、愛と真心をもってこれに代用したし。

兄弟が田を分取りの争ひは

田分けものや人のいふらん

親友の仲も互に敵となる

欲ははげしき剣なりけり

9月23日

人もし我をほめなば退いて自ら問え、我これに値するやと。誉を聞いて心に恥じなば値するほどに進め。ひともし我を謗(そし)らば退いて己に問え、我これに値するやと。謗りを受くる理由わが身に存せざれば、謗るものの不明を憐み、彼らの目の開くを祈れ。

今日ほめて明日悪く言ふ人の口

泣くも笑ふもうその世の中

たれこめて己にただせ世の中を

ほめる言葉もそしる声をも

9月25日

事の成る成らぬは天に任し、自分はひとえにその日その日の務めを全うすれば足る。その結果が思う通りに行かずとも、これ必ずしも失敗でない。植うる種子は一月で生ゆるもあり、百年後に芽(めざ)すもある。人生は限りなきの播種(たねまき)なり、発芽も収穫も天意にあり。

明治天皇御製

むらぎもの心の限り尽くしてん

我が思ふこと成るも成らずも

9月29日

気長く心穏やかにして、よろずに儉約をもちいて金を備うべし。儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり、この世に客に来たと思えば何の苦もなし、朝夕の食事うまからずともほめて食うべし、元来客の身なれば好き嫌いは申されまじ、今日の行いおくり、子孫兄弟によく挨拶をして、しゃばの御暇(いとま)申すがよし。

(伊達政宗)

10月3日

わが身がつらいと嘆く時は、他の人も皆それぞれ身の辛さを嘆きおること忘るべからず。天は、決して我にのみ苦を与うるにあらず、我に当たる風は人にも当たり、わが身を濡らす雨は他の身をも濡らすなり。

一筋にこころ定めよ浜千鳥

いづくの浦も波風ぞ立つ

10月10日

徳は知らざるに行うを上とす、徳と知りてするを中とす、努めてするは下。徳を行うて誇ればもはや徳にあらず。忠孝も貞操も苦しみて尽くすは、尽くさざるには勝れども、無意識にも尽くすをもって至高とす。

うつるとは月も思はずうつすとは

水も思はわぬ広沢の池

主に忠親には考をなすものと

知らですこそ誠なりけり